

終章 多文化共生社会の実現に向けて——移民の社会参加を促す要因——

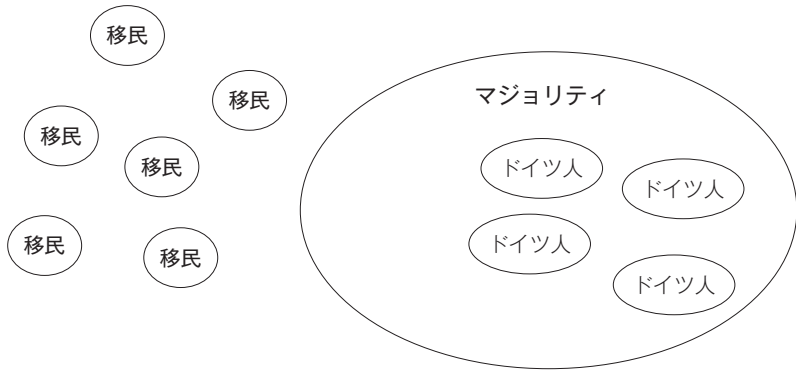
第4章、第5章では、具体的にNRW州ビーフェルト市における移民家庭への教育支援の事例を取り上げた。最後に、これらの事例において、移民とドイツ社会が分離するのではなく、関係性を形成・維持し、そのこと自体をマイクロ・レベルとマクロ・レベルでどのように捉えうるのかという点を整理したい。その際、各事例の鍵となるコーディネーターとしての支援者の存在に着目し、支援の場においてかれらの存在がいかに移民家庭とドイツ社会とを結びつけ、関係性の変容の契機を作り出すことになっているのかという点を検討する。最後に、各事例から導き出された、多文化共生社会の実現に向けた教育支援に関する示唆を提示する。

1 ドイツ社会とのつながりを生み出す支援者

RAAやS保育施設において見られる移民家庭に対する支援は、移民にとって身近なドイツ社会、すなわち、学校や保育施設との関わりを持つ契機を生み出すものとなっていた。それは、支援者が移民の持つ差異をどのように捉え、かれらに対するアプローチを試みるかという点が大きく関わる。これについて検討するために、移民とドイツ人、あるいはドイツ社会がどのような関係にあるかをまず確認していきたい¹。

定住し、すでに世代を重ねている移民であっても、マジヨリテイであるドイツ社会に対し、社会参加以前に壁を

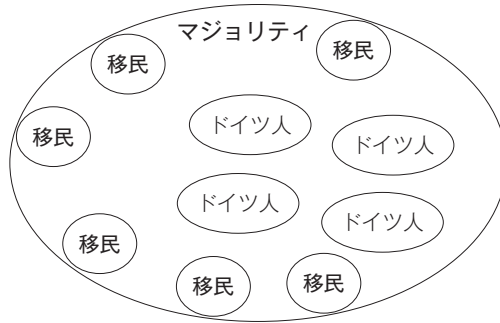
図2 移民とドイツ社会との分離



感じている。それは、移民とドイツ人の間にある言語や宗教といった差異が関係している。移民もドイツ人も互いの差異を理解せず、互いに対するステレオタイプだけが助長されることがある。そのような場合、図2に示すとおり、移民とドイツ人が分離した状態である。さらに、移民の中でもエスニック・コミュニティに属さない場合や、ムスリム女性のように他者との関わりを制限される場合もある。そのような場合、移民がドイツ人やドイツ社会と関わりを持つことも、エスニック・コミュニティと関わりを持つこともなく、各々が孤立している。この状態では、個々人の関係性は構築しようにも構築されない。

しかし、ドイツ社会で暮らしている以上は、何らかの形でドイツ社会に入っていくかざるを得なくなる。それは、子育てや職業生活など多様な場面で現れる。図3に示す状態は、ドイツ社会に入っていくにしても、ドイツ人との相互理解が促進されぬまま、差異があるゆえに移民が周辺化されている。この状態では、ドイツ的な価値観を持ち、ドイツ人のように振る舞うことを移民に求め、そうすることのできる移民をマジョリティ社会の中に取り込もうとする。つまり、これは同化的なあり方になる。このようなあり方では、結局のところ、ドイツ人が暗黙のうちに持つ権力が保たれ、移民はマジョリティ社会に追従する以外ない。このような状態の中では、移民の積極的なドイツ社会との関わりや参加は期

図3 周辺化される移民



待されず、移民とドイツ人との間の関係性は構築されない。

では、どのようにすれば移民とドイツ人との分離を防ぎ、移民がドイツ人やドイツ社会と関わりを持ち、積極的な参加を促すことができるのだろうか。これを実現するために、多様な場面で「統合」や「共生」を理念に掲げた移民支援が行われている。この移民支援のプロセスでは、ドイツ人との関わりを持つ以前に、まずは移民同士の関係性構築も重視されている。支援の場に存在する移民は、そこで同じような境遇に置かれている移民と出会い、知り合う。第4章第2節(3)で取り上げた、R A Aビーレフェルトの「親と学校の対話」プロジェクトを念頭に置き、考えてみよう。多くの場合、移民支援の第一歩としてドイツ社会に関する情報提供が行われるのだが、単に情報収集に来ている移民もいれば、自身が抱える明確な課題を解決するために、そこに足を運ぶ移民もある。そうしたなかで、移民同士が知り合いになると、支援者のアドバイスもさることながら、同様の課題に直面し、対応した他の移民の経験なども、移民にとって重要な情報となる。支援を一つの契機として、情報や経験を共有することにより、移民同士の関係性が構築され、それがネットワークとなっていく様子が見られる(図4)。

このような移民同士の関係性は、必ずしも閉鎖的なエスニック・コミュニティの創出を意味するのではない。移民同士の関係性は、それが互助的な関係になり、ある種の自助組織的な機能を持ちうる。移民がドイツ社会において周辺